五雲会

二〇一九年十二月十四日（土）
開演 十二時（正午）
開場 十一時
於 宝生能楽堂

演目の解説

能「巻絹」（まきぎぬ）

勅命により千匹の巻絹が熊野に集められることになりましたが、都よりの使いが到着しません。実は使いの男は途中で「音無天神」に立ち寄り、梅の花を見て天神に一首の和歌を捧げていたのです。期限が設けてあるのに何故遅くなったと、臣下は問答無用と男を縛ってしまうと、音無天神が乗り移った巫女が現れ、縛めを解くように言います。巫女は男が心中で詠んだ歌の下の句を詠って疑いを晴らし、和歌の徳を讃えて舞を舞います。

狂言「清水」（しみず）

茶会を開く事になった主人は、太郎冠者に秘蔵の手桶を持たせ、野中の清水へ水を汲みに行くよう言いつけます。水汲に行く太郎冠者は一計を案じ、清水手桶を隠すと屋敷へ戻り、大騒ぎで逃げ帰った太郎冠者に出たので手桶を投げつけ、主人は手桶を惜しがり、自ら取り返しに行くと言います。太郎冠者は先回りして待っている太郎冠者の面を使い、鬼に早変わりする太郎冠者と主人の攻防が見どころです。セリフの掛け合いの妙をお楽しみください。

能「班女」（はんじょ）

野上の宿の遊女花子は、東国へ下る吉田少将と契りを結び、帰りを待ちます。少将はしばらくして仕事を取り交わしましたが、追いかけてしまいます。一方都に上る少将は花子を訪ねまして立ち寄り花子の都へ向かいますが行方がわからず、仕方なく秋には忘れられて、森に着いた少将達は、扇にちなんで「班女」と仇名をつけられた花子に出会い、互に扇を見せ合って再会を喜び、あらためて契りを結ぶのでした。

能「融」（とおる）

旅の僧が都に上り六条河原の院の旧跡を訪ねると、塩汲みの老人に会います。塩汲みとは不審に思った僧が尋ねると、老人は河原の院に昔、源融の邸が在ったこと、難波の浦から毎日潮を汲んで都にまで運ばせ、ここで塩を焼いて陸奥の塩釜の風情を楽しんだ融大臣の事を語り、昔を懐かしみます。僧の求めに応じて名所の数々を教えた老人は、最後に汐を汲んで見せると桶を残して消え去り、廃墟に佇む僧の夢中に、在りし日の融大臣となって現れ、月下に舞を舞います。

12:00

巻絹

ツレ 朝倉 大輔
シテ 木谷 哲也

ワキ 森 常好
間 中村 修一

大鼓 佃 良太郎
小鼓 住駒 俊介
太鼓 大川 典良
笛 杉 信太朗

後見 宝生 和英
亀井 雄二

地謡 川瀬 隆士
金野 泰大
佐野 弘宜
内藤 飛能
渡邊 茂人
山内 崇生
大友 順
東川 尚史

13:10

清水

野村 遼太
石田 淡朗

〈休憩十五分〉

13:50

班女

シテ 和久荘太郎

ワキ 大日方 寛
ワキツレ 野口 能弘
〃 舘田 善博
間 石田 幸雄

大鼓 亀井 広忠
小鼓 鳥山 直也
笛 小野寺竜一

後見 今井 泰行
小倉健太郎

地謡 今井 基
金森 隆
辰巳大二郎
佐野 玄宜
野月 聡
金森 秀祥
辰巳満次郎
高橋 憲正

〈休憩十五分〉

15:35

融

シテ 小倉伸二郎

ワキ 安田 登
間 竹山 悠樹

大鼓 飯嶋六之佐
小鼓 森澤 勇司
太鼓 徳田 宗久
笛 栗林 祐輔

後見 武田 孝史
小林 晋也

地謡 辰巳 和磨
田崎 甫 水上 優
金森 良充 朝倉 俊樹
藪 克徳 東川 光夫
澤田 宏司

終演予定 十七時五分頃

次回予告

二〇二〇年一月十八日（土）
正午 始

春日竜神 小倉健太郎
東 北 當山 淳司
鍾馗 藪 克徳

文化庁文化芸術振興費補助金
（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会